OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	京都市方言の丁寧融合型尊敬形式「お～やす」
Author(s)	森山, 卓郎
Citation	阪大日本語研究. 1994, 6, p. 93-110
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/5698
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

京都市方言の丁寧融合型尊敬形式「お～やす」

A Survey on "O～YASU (a form of upward treatment)" in Kyoto Dialect

森山卓郎
MORIYAMA Takuro

キーワード：「やす」，尊敬，丁寧，京都市方言，年齢差

1．はじめに

京都独特の敬語法としてよく知られているものに，「お～やす」という形式がある。例えば，井之口・堀井(1992:72，298)では，「尊敬の助動詞」として位置付けられ，

コノ着物コーテオクリャス。（買ウテ＋オクレヤス）[1)]

チョットモオイデヤサシマヘン。

のような文が例として挙げられている。しかし，この形式は，次に述べるように，いわゆる典型的な素材敬語としての尊敬語形式（第三者待遇形式）とは異なった性質をもつ。

第一に，「お～やす」は，形態的に丁寧形式が出現していないにもかかわらず，目上の聞き手[2)]に対してそのまま使える。例えば，旅館の女中が客に来客を取り次ぐ場合に，

オ客サンガオコシヤシタ。

などと言うことができる。この点，一般的な尊敬語形式なら後に丁寧形式を付加しなければならないが，「お～やす」においてはそれがない。

第二に，「お～やす」は，命令形の形態ではないにもかかわらず，

オスワリヤス。（≒座って下さい。）

のように命令表現（「依頼」と言うべき場合もあるが，以下，「命令」で一括する）となり得る。もちろん意向を問うタイプの命令文でもない。このような形式は，同じ京都市方言の中にも，共通語の中にもほかにない[3]。

こうした現象を見る限り，「お～やす」という形式は，単に尊敬を表す形式だとして位置付けるわけにはいかなくなる。

さらに，現在この形式は明らかに衰退しつつある。個人差もあるが，この形式を生産的な形式として日常的に使う世代は，もはや熟年，老年層以上だけである。そうした衰退過程において，年齢に応じた用法上の変異も生じつつある。

そこで，ここでは，京都市方言での「お～やす」という形式の現在の用法を，変異の問題も含めて報告しておきたい。

2．調査の概要

調査は1993年から1994年にかけて対面，または電話によって直接行なった。主な調査項目は，「お～やす」という形式を，(1)第三者を主語にした文で使うかどうか，(2)その主語人物が待遇的にどうカテゴライズされるか，(3)聞き手が待遇的にどうカテゴライズされるか，(4)聞き手が主語となった用法の場合はどうか，(5)依頼表現としての用法はどうか，といったことである。インフォーマントは，名前の頭文字の横に年齢を併記する形で表す。例えば，U90は90歳の人物である。なお，ここでは「お～やす」の用法を体系的に調査することを目的としたので，インフォーマントは少数である。また，敬語を使いやすいとされる女性を基本的な調査対象とし，S64のみ男性である。次にインフォーマントの方々の年齢(1994年元日現在）と出身区（東山区，上京区，中京区，左京区，右京区，下京区：下線部が略号）と現在の住所を示す[4]。現在の住所が京都市内でないインフォーマントがあるが，言語形成地や，これまでの主な居住地は京都

市内であり，京都市方言話者としての問題はない。

ｲﾝﾌｫｰﾏﾝﾄ：	U90	O74	Y73	K73	M60	T60	N59	KE54	H43／S64（♂）
年　齢：	90	74	73	73	60	60	59	54	43	63
出　身：	上	上	東	中	上	東	上	中	下	上
現住所：	右	上	上	中	大津	右	右	右	宇治	右

3．形態について

まず，「やす」そのものの形態は，「オ着ヤス」「オ入リヤス」のように，

お＋連用形＋やす

という形をとる。形態的には，

オハイリヤシタ。（連用形）

オハイリヤスケド。（終止形）

オハイリヤス方。（連体形）

のように，一応の五段型の活用を持つようであるが，未然形，命令形はない[5]。なお，仮定形にあたる形式も，通常は，連用形に「タラ」を付けた形が一般的であり，

オハイリヤシタラ

という形になるようである。よく知られている通り，仮定形に「ば」を付けた形を使わず，「連用形＋たら」を使うというのは，関西地方の一般的な用法である。

なぜ命令形が事実上ないのかという点については，「お～やす」という形ですでに命令の意味になるからであるが，この点は後で検討したいと思う。

また，未然形の場合，「う，よう」のように話し手の意志を表す形式は尊敬語という意味条件からつかないのは当然として（自敬表現になってし

まう），否定形式がつく場合，

オハイリヤサシマヘン。

のように，「シマヘン」という中で丁寧形式が出現する。

オハイリ＋ヤシ＋ハ＋シマヘン

という形がもとになっているためだと思われるが，この点についても後でもう一度取り上げたいと思う。

4．調査結果のあらまし

最初に調査結果をまとめておく。

図1：「お～やす」の用法の変遷の概略

	第三者主語	聞き手主語	命令表現の主語
U90	○	○	○
O74	○	○	○
Y73	○	○	○
K73	○	○	○
M60	○（要ドス）	○	○
N59	－	○	○
KE54	－	○	○
S64	－	－	○
T60	－	－	○
H43	－	－	－

（ただし，聞き手主語は命令表現を除く）

指摘しておきたいことの第一点は，用法が縮小しつつある状況である。この「お～やす」という形式は，主語を高める，尊敬語形式であるが，その用法は縮小しつつある。「お～やす」にも，いわゆる尊敬語として第三者を主語にした言い方があるが，それは７０歳以上であった。一方，６０

歳あたりより年齢の若いインフォーマントでは，命令表現としてしか「お～やす」を使わない。そして，その中間に，命令用法以外にも，いわゆる対者的な用法で聞き手を主語とする場合なら「お～やす」を使うというインフォーマントがあった（図１を参照。変化の過程を示すためにインフォーマントの配置を若干調整してある）[6]。つまり，聞き手を主語とする用法，さらに，その中でも命令表現としての用法が「生き残」りやすかったということがわかる。また，命令用法の場合，他の用法と比べて待遇の高さに違いがある。なお，４０歳台まで下がると，「お～やす」はもうほとんど使わない。

また，調査結果の第二点は，「お～やす」の敬語形式としての位置付けである。藤原(1978:564, 1979:458)に，「やす」が各地で尊敬表現としての意味を持ちつつも，東北地方を中心として丁寧表現として展開している旨の詳細な報告がある。しかし，京都市方言においては，基本的に丁寧語としての扱いはほとんどなされていない。「お～やす」は，確かに尊敬語であり，従来もそう扱われて来たのであるが，一方で丁寧語としての要素も持っている。つまり，その形式単独で聞き手に対する上向き待遇をも表せるのである。後述するように，これは丁寧融合型尊敬語と呼ぶべき形式である。

以下，もう少し詳しく述べていきたい。

５．「高い」尊敬語としての「お～やす」

まず，「お～やす」の尊敬語としての用法を検討してみたい。尊敬語としては，井之口・堀井(1992:298)に指摘がある通り，「お～やす」の敬意は基本的に高いと言える。図２は，登場人物（主語）の違いを整理したものである。

まず，少し触れたように，Ｔ60など，相対的に「若い」インフォーマントでは，素材待遇的に，第三者を主語として「お～やす」を使うことがない。「第三者が，お～やす（やした）」という言い方がそもそもないわけ

である。しかし，一定の年齢以上になれば，素材待遇（尊敬形式）としての用法が保持されている。

図２：話題にした言い方での主語の違い（「～が，お越しやした／おいでやした系（○）」か「～が来やはりました系（－）」か：対面用法ではない）

	和尚様	出入りの商売の人（酒屋さん等）
U 90	○	－
O 74	○	－
Y 73	○	－
K 73	○	－
S 64	－	－
M 60	○	－
T 60	－	－
N 59	－	－
KE54	－	－
H 43	－	－

また，図２に明らかなように，素材待遇の尊敬語としての「お～やす」の待遇価値は高く，「和尚様」には使っても，「出入りの商売の人」には使わない。例えば，

和尚様ガオコシヤシタ。

のように言えるのに対して，酒の配達にきた「酒屋さん」を主語にして，

*酒屋サンガオコシヤシタ／オイデヤシタ。

のようにいうことはないのである（「オイデヤシタ」は「オコシヤシタ」より少し敬意が下がるが，いずれも言わない）。むしろその場合には，

酒屋サンガキヤハッタ。

と言うという。なお，蛇足ながら，「お～やす」は，形態的にも，「お～」という形になっていて，「はる」ならば，

*オイデハッタ

などと言わないのに対して，「お～やす」では，「オイデヤシタ」と言える。このように，本来，高い待遇の尊敬語を含む形式となっていると言える。なお，「なはる」は大阪などでは使うが，京都市では使わない。

6．聞き手めあての待遇－「丁寧融合型尊敬」形式－

次に，「お～やす」の丁寧語的な要素（聞き手めあての待遇）について見てみる。図3は，聞き手による違いを整理したものである。

図3：「和尚様がお越しやした。」と言うか（○：使用，－：不使用，以下同）

	目上の人物が聞き手	目上でない人物が聞き手
U90	○	－
O74	○	○
Y73	○	－
K73	○	－
S64	－	－
M60	○（ドスが必要）	○
T60	－	－
N59	－	－
KE54	－	－
H43	－	－

（目上の人物：「別の和尚様」，目上でない人物：弟妹など）

T60以下の事例は，第三者の登場人物を主語とした文を言うことがなくなっているので措くとして，それ以上の年齢では，「お～やす」は聞き手が目上扱いされる場合にしか出て来ないと原則的に言える。つまり，話題の登場人物が同じく「和尚様」であっても，U90，Y73，K73，T60など

では，聞き手が目上である場合にだけ，

和尚様ガオコシヤシタ。

のように言うのである。では，聞き手が上向きに待遇されない場合（弟妹に言う場合など）はどう言うかと言えば，

和尚様ガキヤハッタ。

と言うという（O74を除く[7]）。

一般に，（高い待遇価値を持つ）素材敬語は，「改まった」場面でしか実際には使われないという傾向がある[8]。例えば，共通語の「お～あそばす」は敬意が高い素材敬語であるが，改まった場面でしか使われない。それで，実際の用法としては，

先生がおいであそばしました。

のように，聞き手目当ての丁寧形式と共に使われるのが普通である。

京都市方言の「お～やす」も，基本的には，改まった場面で使われる待遇価値の高い形式である。ただ，注意したいのは，この「お～やす」が単独で丁寧な場面で使うことができるという点である。つまり，その形式自体の意味として，丁寧な聞き手待遇的意味を含んでいるのである。ここから，「お～やす」は，尊敬語（素材敬語）と丁寧（聞き手めあての敬語）との両方の融合した敬語形式として，「丁寧融合型尊敬」形式と呼んでおきたいと思う[9]。いわば，一つの形式で，「お～になります（お～遊ばします）」の全体に相当する意味となっていると言える。

「お～やす」のこうした特性は，形態にも現れている。すなわち「お～やす」の直後に丁寧形式をつけることはできないのである。例えば，

*オ客サマガ，オコシヤシマシタ。

*オ客サマガ，オコシヤシオシタ。

のように言うことはできない。

ただ，尊敬と丁寧の融合といっても，意味の重点はあくまで素材の待遇としての前者にある。例えば，

オ～ヤシテオクレヤス

のように繰り返して言う場合など，初めの「ヤス」に丁寧的要素があると

は言いにくい。その点で，「尊敬融合型丁寧形式」というべきではない。また，丁寧という聞き手待遇をいわば本務にする形式ではないので，「のだ」型の文になるなど，形式として丁寧形式を付加できる条件があれば，例えば，

　オ客サマガオコシヤシタンドス。

のように丁寧形式と共起することはできる。

なお，否定する場合，形態的には少し複雑になり，

　オコシヤサシマヘン。

という形になる。このもとになるのは「オ～ヤシ＋ハ＋シマヘン」という形だと思われるが，言うまでもなく，「お～やす」直後に丁寧形式がついた形ではない。京都市方言での丁寧な文体での否定は基本的に「～（連用形）はしない」という複合的な構造をとらねばならない。「飲みません」が「ノマシマヘン」となるように，否定部が「シマヘン」という形になるのである。そういう点で，「ヤサシマヘン」という語形自体は，ここでの議論への反例ではなく，むしろ，「お～やす」を否定する場合，通常形での否定形式はなく，丁寧な否定としての形にしかない，ということとして位置づけるべきである。

このように，「お～やす」には形式自体に丁寧形式としての意味が融合しているのであるが，ただ，現在では，明示的な丁寧形式が無い点で，インフォーマントによってはある種の「言いにくさ」を感じることがあるようでもある。年齢的に境界に当たるM60は，いわば完全な尊敬語（素材敬語）としての用法となっていると言え，聞き手を高く待遇する場合には「お～やす」だけでは不十分だという内省であった[10]。Y73の内省においても，聞き手に対して，より丁寧な言い方をしたい場合，「お～やす」単独で使うこともあるが，一方で，共通語を使わざるを得ないと思うこともあるとのことである。こうしたことは，この用法の衰退過程に関連している。

なお，「やす」の起源としては，「オ～アソバス」説や「ヤル」に「マス」がついたという説などさまざまな議論があるが，現在のところ，定説

はないようである。今後の課題とせざるをえない。

7．聞き手が主語となる場合

こうした「お～やす」の意味は，特に，聞き手が同時に主語になっている場合，つまり，対面待遇の場合に使いやすい（ここでは分かり易いように疑問文の例を挙げる）。これが「お～やす」の形式の衰退過程にも反映している。

まず，

アノ和尚様ハイツモコレオアガリヤスナー。

のように，第三者的な待遇の「お～やす」は，高年齢（概略７０歳台以上）のインフォーマントでは使われるのであるが，その次の世代（Ｎ59，KE54）では使われない。しかし，この世代でも，聞き手が同時に主語となるような用法でなら，「お～やす」を使うことができる。例えば，

和尚様，コレオアガリヤスカ。

のようには言えるのである。後述するように，命令文としての用法では，「お～やす」はもっと下の年齢でも使われるが，ちょうどその過渡的な年齢において，対面的な場合に，命令以外の用法で「お～やす」が使えると言える。

なお，この場合も，主語は特に高い待遇であり，

*酒屋サン，コレオアガリヤスカ。

のように言うことは普通ない。

8．命令表現として使える「お～やす」

8．1．命令用法の「お～やす」の待遇

命令用法では，「お～やす」単独の待遇はそれほど高くない。Ｙ73によれば，

オ入リヤス

という言い方は同等レベルへの言い方である。待遇的に高くするには，話し手受益を表す「てくれる」をつけて，

入ットクリャス

のような形にしなければならない。これはちょうど共通語における「～しなさい」と「～して下さい」との待遇的な位置関係に平行している。

「～テオクリャス」の場合，主語（同時に聞き手でもある）は高い敬意をもって待遇される相手にも使えるが，一方で，それほど高い敬意がない場合にも使える。主語が和尚様であっても出入りの商売の人であっても，「～テオクリャス」が使える。例えば，

（和尚様に，）入ッテオクリャス。

（酒屋さんに，）入ッテオクリャス。

のように言える。もっとも，さらに高く待遇する場合には，

（和尚様に，）オ入リヤシテオクレヤス（「～ヤシトクリャス」）

という言い方もある。

命令表現の場合，「お～やす」の待遇的価値が相対的に下がるということを見たが，共通語の命令形でも同様のことが言える。

これを読みなさい。

のような「なさい」は，明らかに，「なさる」という尊敬語形式の命令形である。尊敬語の敬意の対象としての主語は，同時に聞き手でもあり，その意味で，丁寧表現化している。特に，待遇の高さとしては，「～なさい」の方は，「～なさる」よりもはるかに待遇的に低い。その点，「ます」の丁寧形であるべき「ませ」は，共通語では「行きませ（命令形）」のように言わず，「なさいませ」「下さいませ」のように承接して待遇的価値をいわば支えることになっている。このように尊敬形式も命令文の文末では丁寧表現化し，待遇的価値が下がる。やはり，これは，聞き手を拘束するという意味によると思われる（共通語でも高く待遇する命令形使用表現の場合，「お～下さい」のような形で内容部分に敬語が入る）。

そういう点で，「～テオクリャス」という形式は，高い待遇での命令表現として，非常に重要な形式となっている。

８．２．「お～やす」の命令用法は使用者の層が厚い

そこで，命令用法の「お～やす（テオクリャス）」の使用状況について見てみる。

使用状況を見ると，インフォーマントＴ60，Ｎ59，KE54，Ｓ64の場合，命令表現に限り，「お～やす」を使うことがわかる（図３参照）。命令表現において使用層が厚いことになろう（もっとも，４０歳台のＨ43は，「お～やす」自体を使用しない）。

図３：「待っとくりゃす。」などと言うことがあるか

	和尚様が聞き手	出入りの商売の人が聞き手
U 90	○	○
O 74	○	○
Y 73	○	○
K 73	○	○
S 64	○	○
M 60	○	○
T 60	○	○
N 59	○	○
KE54	○	○
H 43	－	－

これは，地理的分布の上でも興味深い問題であって，「オヤスミヤス」のような挨拶で使われる命令法（依頼文としての用法）の分布が，京都府内でも丹波地方にまで及んでおり，命令用法の勢力が大きいという（奥村1962:282，遠藤1977:106）。

では，なぜ命令表現の「お～やす」の使用層が厚いのであろうか。

第一に考えられるのは，聞き手を拘束する表現である以上，丁寧な言い方として，高い待遇が好まれるということである。共通語でも，比較的敬

意が高くないとされる尊敬語「～られる」は，現代の会話では命令の中では使われず，「待たれて下さい」などとは言わない。これに対して，待遇的に高い「お～遊ばす」ならば「お待ち遊ばして下さい」のように言えるのである（ただし，位相的な偏りもあろう）。なお，京都市方言でもさほど敬意の高くない場合でも使える「はる」には，命令形の用法はない。こうした命令表現での待遇関係を考えれば，前述のように，高い素材待遇形式としての「お～やす」「～ておくりゃす」の意味は命令表現に非常によく適合することになる。

第二に考えられるのは，命令形式の回避ということである。京都市方言での命令表現としては，常体の場合でも，乱暴な言い方を避けるならば，

トッテ。

トリ。

のような連用形が一般的である（大まかには「連用形＋テ」は聞き手の負担になることを頼む場合に使われ，「連用形」は，そうでない場合に使われる[11]。また，やや丁寧な言い方として「オ食べ。」のような「お＋連用形」という形もある）。

そして，そもそも，「はる」そのものを命令形にした「～しはれ」のような言い方は京都市方言にはない（前述）。また，「なはる」という形式も京都市方言にはなく，「～しなはれ」のように言うことはない。このように，京都市方言では，命令形が丁寧な言い方としては回避される傾向にあると言えそうである。これは，なるべく婉曲的な言い方が好まれるといった京都市方言の表現として[12]，命令形の持つ聞き手を拘束する意味が適合しにくいということかもしれない。このように，命令形を回避した高い待遇の命令表現の形式がほかに無いということによって，「お～やす」には大きな存在意義があると言える。

さらに，第三に，意味的な適合性についても考えておく必要があろう。先に述べたように，丁寧表現が尊敬表現に融合している点で，この形式は，聞き手が同時に主語という意味構造を持つ命令文に，意味的にふさわしいと言える。

このように，「お～やす」という形式は，京都市方言での命令表現において，極めて重要な位置を占めているのである。

9．おわりに

以上，「お～やす」の意味・用法と使用状況について，待遇表現としての観点から報告・検討した。この形式は，高年齢層の用法では，丁寧融合型尊敬形式として位置付けられる，極めて興味深い形式であった。

これは，京都市方言の敬語体系全体の問題として位置付ける必要がある。例えば「はる」は素材待遇の敬語であるが，厳密な意味で話し手が素材待遇をするとは言いにくい側面ももつ。例えば，「はる」敬語では，

オ兄チャン，イヤハル？（親が上の息子のことを下の息子に聞く場面）

オ兄チャン，キヤハッタデ。（親が上の息子のことを下の息子に言う場面）

のように言える。つまり，単に話し手自身の敬意を表すというよりも，敬意の基準を聞き手に転移させても使うことができるのである。もちろん，親が自分を基準として言う場合には，自分の息子のことを「はる」をつけて言ったりはしない。しかし，言う相手が「弟」ならば，視点の基準をそちらに転移して，「はる」をつける言い方をすることがよくある。いわゆる尊敬語の基準が話し手にある共通語は，この点で，「はる」敬語と決定的に違う。

また，宮治(1987)の指摘するような現象は，京都市方言の「はる」の用法にもあり，

オトウサン，コレ見タ？（話題の人物が聞き手の場合）

のように，聞き手として言う場合には素材敬語形式をつけないこともなくはない。一方，第三者待遇の場合には

オトウサンハコレヲ見ヤハッタヨ。（純然たる話題の人物として）

素材敬語形式は必須である。いわば，話し手の「敬意」というよりも，ある種の「わきまえ」として使用される側面が大きいと言えるのかもしれな

い。

こうしたいわば「柔軟な」用法の「はる」敬語に共存して，敬意の高い改まった「お～やす」があることに注意しておきたい。「お～やす」ではこうした転移用法はなく，また，聞き手に対する待遇的要素を融合させてもいるのである。「お～やす」は，改まった言い方で素材に対する高い待遇を表す形式として位置付ける必要があるのである。

この形式の命令用法も，命令文における待遇の問題と連動させて考える必要がある。「はる」形式自体には命令形がないが，一定の待遇的配慮を持った命令表現として，「お～やす」は非常に重要であり，それが現在での比較的根強い使用状況として反映していると見ることができよう。

こうして考えてみると，「お～やす」は，単なる一方言形式であるにとどまらず，敬語体系全体を考える上で重要な形式だと言えよう。

ただ，共通語が敬意の高い形式として侵入してきたこと，そして，形式自体にも，明示的な丁寧形がないことなどが衰退原因となって，この形式自体は，今まさに滅びつつある。体系的でしかも規模の大きい調査を行うことが必要であろう。また，近世後期京都方言について調査すること，周辺・他地域を調査することなども，今後の課題としたい。

注

1) ～シテオクレヤスは～シトクリャスという発音で言われることもある。
2) 以下，特に断らない限り，「聞き手」は「対者」と同義で使う。また，対者敬語を丁寧語と呼ぶ場合もある。
3) なお，共通語にもテ形で命令を表すことはあるが，連用形での命令はないので，「下さい（くれ，頂戴）」の略と見るべきであろう。そうした点でも「お～やす」の形式とはまた違う。
4) いずれも，原則として京都市中央部となっている。微細な用法に関しては，祇園，室町などというように，地域による差異もありうるが，ここで問題とするような敬語の体系としては基本的な違いはないと言

える（そういうインフォーマントの内省もある）。Y73は小学校低学年までを大津市で過ごされたが，以後長く京都である（配偶者も京都の方である）。また，これ以外にもインフォーマントの方々のお世話になった。

5) 湯沢（1938:437）によれば，「やす」に「太夫す一つ上りやせ」（双蝶々曲輪日記：竹田出雲・寛延二）のような形が見える。

6) T60は逆転することになるが，N59，KE54が主婦なのに対し，T60は教師として勤務しており，変化が比較的早く進行しているということが考えられる。

7) O74には，御所育ちの祖母の影響で，特にいつも丁寧な言い方をしているとの内省がある。

8) 宮治(直言)によれば，滋賀県甲賀郡水口町八田方言での「はる」と「る・らる」の使い分けも，敬意の高い素材敬語の聞き手待遇的機能に関連して位置付けることができる。なお，井上(1981)の「素材敬語の対者敬語的使用」という興味深い指摘は，ここで指摘した「お～やす」の用法と，素材敬語と対者敬語との相関という点で通じるところがある。しかし，もちろん，京都市方言においては，改まった場面でだけ丁寧語に従属して素材待遇が現れるということはない（特に「はる」の用法など）。その意味では，素材待遇形式が高頻度に使われる京都市方言での「お～やす」の用法は，いわゆる関西方言以外で言われるところの「素材敬語の対者敬語的使用」ということとは，現象的に大きく違っていることになる。

9) 「お～やす」は滋賀県にもある。宮治(1987:44)は，「老年層が話し相手待遇の場合だけに用いている。丁寧語的な性格が強い語形といえようか。」としている。京都市方言の「お～やす」でも同じような用法があるが，ただ，前述のように，高年齢のインフォーマントでは，話し相手待遇（聞き手主語）でなければならないという制約はない。「ソウイウオ方モオイヤス。」のように，第三者を主語としてとることもできる点で，京都市方言の「お～やす」そのものは，やはり，丁寧融合型尊敬

形式と呼ぶのが適当であろう。

10) M60は，国語学の研究者でもあり，完全な素材敬語としての尊敬語の扱いが意識的になされているということも考えられる。

11) もっとも，起源的には後に命令形の形態が後続していたと考えることはできる。

12) 例えば，井之口・堀井(1992:207)にも，否定疑問の形式をよく使い，命令形式は余り使わないといった指摘がある。

参考文献

井上史雄1981「敬語の地理学」『国文学解釈と教材の研究　敬語の手帖』26-2 学燈社

井之口有一・堀井令以知1992『京ことば辞典』東京堂出版

楳垣　実1962「近畿方言総説」『近畿方言の総合的研究』三省堂

遠藤邦基1982「京都府の方言」『講座　方言学7　近畿地方の方言』国書刊行会

奥村三雄1962「京都府方言」『近畿方言の総合的研究』三省堂

岸江信介1990「『昭和』における大阪市方言の動態」『国語学』163

寺島浩子1981「近世敬語と現代敬語」『講座日本語学9』明治書院

藤原与一1978『方言敬語法の研究』春陽堂

1979『続方言敬語法の研究』春陽堂

宮治弘明1987「近畿方言における待遇表現運用上の一特質」『国語学』151

1992「方言敬語の現在」『日本語学』92-10

宮地　裕1968「現代敬語の一考察」『国語学』72

森山卓郎・安達太郎(準備中)『セルフマスターシリーズ・文の述べ方』くろしお出版

山崎久之1963『国語待遇表現体系の研究』武蔵野書院

湯沢幸吉郎1938『徳川時代言語の研究』風間書房

付記

井川敬子，大槻暢子，奥野綾子，奥野矢重子，沢田喜代子，寺村喜久江，山口ツル，森山ウタ，森山茂，森山恒子，山口ひろ子，の各氏，そのほかのインフォーマントの方々に心より感謝致します。また，宮治弘明氏と森山由紀子より全編にわたって非常に有益な助言を得ました。記して感謝致します。ただし誤りはすべて筆者に帰すものです。

（京都教育大学教育学部助教授）